

東北ヘルプ ニュースレター

2020年 夏号

- 2020年6月29日 2020年度「東北ヘルプ」総会報告 1～4頁
- インタビュー「パンデミック・礼拝・平和」 5～11頁
- 子どもたちを「追加被ばく」から守る 12頁
- 気仙沼「障がい児」支援の展開 13頁
- 巻末言 14頁

東北ヘルプのニュースレターをお届けします。

「2020年度総会」の報告には、「これから東北ヘルプをどうするか」を主題とする議論が掲載されています。

感染症の世界的拡大（パンデミック）と向き合って、被災地から発信できることがあると思います。仙台キリスト教連合の「平和祈禱日」を念頭に、礼拝の実際と教会の歴史を振り返って、対話をいたしました。その要約がございます。

原子力被災地と津波被災地から、一つずつ、活動が展開したことの報告がございます。

今回は、「文字ばかり」になってしまいました。それでも「今」発信されるべき内容であると確信しています。どうぞ、ご高覧下さい。

2020年7月5日 東北ヘルプ事務局長 記

2020年6月29日 2020年度「東北ヘルプ」総会 報告

東北ヘルプ事務局長 川上直哉

2020年6月29日（月）午後7時半から、Zoomを用いて、NPO法人「東北ヘルプ」総会を開催しました。その報告を以下にいたします。

1. 財務関係

2020年度末時点での決算（監査済）におけるNPO法人の財産は右の通りです。

2019年度の収入は「約861万円」でした。これは前年対比9%減となりました。そこで、2020年度収入を2019年度に対して20%減と見積もり「700万円」として、予算を承認いただきました。

2019年度支出は「約790万円」でしたので、上記収入予算に合わせて、2020年度は「90万円」の支出抑制をすることとしました。感染症拡大で移動と会議の経費を抑制することで、前年度とほぼ同様の支出を目指すことが承認されました。

貸借対照表			
2020年3月31日現在			
特定非営利活動法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ			
(単位:円)			
科目・摘要	金額		
I 資産の部			
流動資産			
現金預金	2,149,114		
仮払金	200,000		
流動資産合計	2,349,114		
資産合計			2,349,114
II 負債の部			
流動負債			
未払金	170,647		
預り金	23,749		
流動負債合計	194,396		
負債合計			194,396
III 正味財産の部			
正味財産			
前期繰越正味財産額	1,535,307		
当期正味財産増加額	619,411		
正味財産合計	2,154,718		2,154,718
負債及び正味財産合計			2,349,114

(詳しい資料は <https://bit.ly/3dQKKPX> をご覧ください。)

2. 協議

NPO法人「東北ヘルプ」は、2020年7月から「8年目」となります。最初「3か月」で終わるはずだった東北ヘルプの事業が長期化する、その対応のために生まれたNPO法人でした。

東北ヘルプ理事会は、「2022年3月まで」は、支援事業を続けることを決定しています。では「その先」はどうするか。「22年3月」で事業を修了するならば、「21年6月」のNPO法人総会で決定して行かなければなりません。そうするのか、どうか——その話し合いが、2020年度の大切な課題となります。

2020年6月29日に行われた総会において、以上の課題が共有され、最初の協議が行われました。以下に、その抜粋を掲載いたします。そして、今後も多くの方々のご意見を拝聴したく願っております。その最初の一步として、どうぞ、以下の議論をご高覧下さい。

事務局：東北ヘルプは、「訪問傾聴」「放射能計測事業」「東北キシタン」「啓発広報」といった事業を継続してきました。この一つずつを振り返りながら、総会にご参加の正会員のみなさまのお考えをお伺いしたく願います。

まず、代表の吉田先生からお願いします。

吉田代表：私たち「東北ヘルプ」が心掛けてきたことは「現場重視」ということです。全国からサポートをいただき、現場の方々が用いる、その取り次ぎをする。それが一

番の役割でした。これだけ年月が経ってもなお（2020年度に）700万円ものご支援を期待できることは、すごいことです。この思いを届ける使命は、ずっとあると思います。そのことが一つです。

しかし、この9年以上、私たちがNPO法人としてやってこれたのは、事務局長が中心となって、いろいろな可能性をつなげてのことでした。この働きなしには、継続は不可能だと思います。今後考えなければならぬことは、「献金の規模」と「事務局長ができる範囲」の兼ね合いだと思います。継続する条件がなくなった段階で終了するという事は、やむをえないし、そうすべきでもあるでしょう。しかし、他方で、「東北ヘルプ」という名前が被災地にあることの意味も大きくなっています。その名前とネットワークを継続できるシステムを、次へと考えていくということを考えることが課題でしょう。

事務局：東北ヘルプの事業の柱として「放射能計測事業」があります。NPO法人の活動が終了すると、この事業は大きな影響を受けます。福島県内で活動を続ける木田先生、ご意見をお願いします。

木田理事：東北ヘルプが、放射能計測事業の事務をしていることには、重要な意味があります。私のかかわりも、放射能の問題に東北ヘルプが正面から取り組むということで、続けました。震災から9年余りがたっています。原子力災害の問題は、全然なくなっていない。いわゆる東電、政府、そして地方行政の方々が終息のために努力をしています。それは認めるとしても、市民の目で現実をしっかりと見て、情報を発信する。それはとても大切なことだと思います。そうした活動は、無くなってはいけぬ活動だと思います。いろいろな不安があります。実際に、計測がされないということになれば、目も耳もない状態で「手探りで進む」ということになってしまいます。そういう危惧を持っています。どういう方向へ進まなければならないか、どう対処す

べきか、そういうことを考えるために、計測所の働きは大切でした。その働きは、今、市民団体と一緒に進められています。東北ヘルプがなくなると、それもどうなるか。そんなことを考えています。

事務局：東北ヘルプは、被災した地域の財産を掘り起こし発信するということを進めてきました。「東北キリシタン」関連の事業は、その果実だったと思います。

阿部理事：「キリシタンツアー」の企画は、今、予想もしないことで、大幅な変更を強いられています。その中で、共同通信社による全国の地方紙での発信がありました。東北の魅力を発信することができていると思います。気仙沼での障がい児福祉事業の展開など、地域の中で求められている役割を果たすこともできていると感じさせられています。これから、発信の可能性は変わるかもしれません。これから、「活動の終了」ということも視野に入れて、できる形での発信を模索して続ける、そういうことを考えています。たとえば「東北キリシタン」を多くの方が知ることになった。これはとても意味があることだったと思います。そういうことがどういうことに結びつくのかは、わからないのですが、でも、私たちができること、その可能性は、変わらずに存在しているし、やらなければならないのだろうと、思われています。

事務局：「被災地を訪問し、傾聴し、課題を共有して、一緒に取り組む」ということを、東北ヘルプはずっと続けています。そうした中で、気仙沼や南三陸での事業は着実な展開を見ることができました。そして、そうした現場の実感を、礼拝や講演、通信物や書籍などで発信を続けてきました。「訪問傾聴」と「啓発広報」が、東北ヘルプのもう一つの柱としてあったように思います。

秋山理事：自分自身としては、気仙沼にかかわりながら、何もできなかった、という思いを持っています。その中で、教会とのつながりについて、反省させられています。

「支援活動を教会に理解してもらおう」ということは、震災直後のころは、牧師として、比較的、容易でした。でも、今はもう、そういうことはありません。どういう風に、支援活動と教会とのつながりを作るか。そこに今、困難があります。すべき活動そのものは、まだまだ、いろいろあると思うのですが。

木田理事：福島県郡山市内の教会に赴任して、8年になります。一番苦労してきたことは、教会と被災地の関係をどう結ぶかという課題です。放射能の問題に敏感ではない教会員もいるのです。でも、8年の間に、信頼は勝ち取ったと思います。教会が整えられてきたな、ということになるかと思えます。それでも、今、放射能の問題は、影が薄くなっています。8年という時間の故です。問題がなくなったのではなく、人が、それだけ慣れたということです。世間も騒がなくなりました。遠くの問題となりつつあります。郡山でも、それは同じです。計測所が、そうした中で、教会にある。計測依頼者も、今もいる。理解者もいる。そうしたわけで、教会は放射能の問題に積極的に関わる、ということにはならなくても、牧師のかかわり方は、尊重してくれているのだと思います。

井形顧問：この議論が続く、ということをもって、その議論の場所にいることの意味を思います。議論は重いけれど、そこに、生きているという感覚が得られます。支援者の支援ということ、祈りを届けるということを吉田先生がおっしゃいました。いろいろな時期に、いろいろな展開を見てきて、今、自分の中に生まれている言葉は「東北ヘルプの立ち位置」ということです。最初、ケリグマ・コイノニア・ディアコニアという言葉で整理して、働きが進められました。それからずいぶん時間が経って、今、「預言者」あるいは「宣教論」ということが分かち合われる場が必要となっていると思います。聖書をどう聞くのか、「宣証」ということは何か、そうした、新しい、リヴァイヴ

させる事柄が、ここにあると思います。そういう意味で「預言者であることを生きる」ということを思わされています。

本村監事：東北ヘルプというものが存在している、ということの意味を感じています。東北から距離的に離れている私の中に「頼もしく感じる」という思いがあるのです。被災地に存在し続けている、働きが生き続けている、ということを感じています。東京にいて、被災地はどうなんですか、ということと言われる方もいます。関心を持っている方がいます。そうしたときに、こうです、と、現地の苦悩や思いを発信する、そういう一つの働きとしての東北ヘルプがあって、そこに魅力も価値もあると思っています。実際、ある程度、ニュースレターなど、まとまった形で、幅を持った、いくつかの必要を発信する場が、東北ヘルプにあります。そうした中で、今後も必要は変わりながらもあり続ける。発信し、つなげていく、遠くから現場へ、現場から遠くの思いを寄せる人へ、と「つなぐ働き」が続けられて行かれれば、ありがたいという思いがあります。働きを継続する中での課題も、重々承知しています。ご負担に心苦しさも感じています。その点は、先生方の思いと同じだと思っています。

中澤理事：現場で活動する自分としては、毎月、こうして会議を行い、いろいろな形で話し合うことは有意義なことでした。しかし、宮城から離れていった方々への負担も、心配としてあります。そこに甘えてしまう自分を申し訳なく感じながら、でも、この大変なところを共有してもらえることが、とても心強く思える。

いよいよ、10年目の被災地です。この先、どうなるか。ずっと思ってきたところに、感染症の広がりがあります。もう、今年2月から三陸地域に行けなくなっています。電話でのコミュニケーションだけは、続けていますが。そうした中で、これから何をすべきか。自分の中で、ふらついでい

ます。でも、東北ヘルプは「なくてはならない」ものです。キリスト教といっても、伝道・宣教を中心に考える多くのグループとは違って、困っている人に、とにかくひたすら、心を寄せる。そこに東北ヘルプの独自性があると思います。そういう意味では、存在し続けることが、うれしいことなのです。手探りのことが続きますから、一緒に、考えていけたら励みになります。ただ、事務局長の負担も気がかりです。「どこかで一区切り」ということも、考えさせられています。

事務局：皆さんから発言をいただきました。吉田代表、これを受けて、どうでしょうか。

吉田代表：二つ、感じました。今、福音派の教会を中心に「キリスト全国災害ネットワーク」が立ち上がりとしています。川上事務局長も中澤理事も参加されます。そして私も、福音主義神学校協議会の身分で参加する予定です。東日本大震災以降、いろいろな災害があつて、支援のモデルが見えてきました。ディアコニアという教会の働きが重要視されています。今回のコロナ禍でも（活動は止まっているかもしれませんが）限られた中で教会関係者を中心としたケアが進みました。そうした「何かしなくては」ということへの教会の意識が強くなったように思います。その一つのモデルとして「東北ヘルプ」があると思うのです。超教派のつながりがあり、そのつながりの中で解決を見出そうとする姿勢が、一つのモデルになるでしょう。

それからもう一つ、中澤理事が「もはや被災地にいない人に、こうした活動が迷惑になっているのではないか」とおっしゃったのですが、それは逆です。私は、被災地を離れてもう6年となりますが、被災地を離れているという「負い目」をずっと感じています。なぜ、自分は被災地にいないのか、と思うのです。ビデオ会議という技術のおかげで、自分自身は何とかつながっているという思いがあるのです。それは、私

にとって、大きいことです。何かを考えるとき、いつもそこ（被災者支援という原点）に帰るのです。ですから「甘えている」とお感じにならないでください。東北ヘルプがある限り、いろいろな形でつながり続けたいと思っています。そんなことを感じています。

本村監事：東京にいる私も、普段、具体的に何かできているとも思えないのですが、こうして関わりをもてますことは、自分にとって必要なことだと感じさせられています。自分が忘れてしまわないために、自分自身に与えられた役割がここにあると思っています。普段、いろいろなことに追われています。なかなか、東北にスポットライトが当たらなくなっています。現地の皆さんに思いを寄せる、そのつながりを与えられていることは、感謝なことです。私にとっては、思いがけず早く東北を離れました。このつながりがなければ、「東北のことを、祈りだけでも！」と思う気持ちを持てなかったかもしれません。いろいろな方にとって、この東北ヘルプの働きが、被災地支援という部分から、キリスト教会のこれからの在り方を探ることにつながるものである、それが東北ヘルプの役割ではないかと思っています。



総会は Zoom を用いて
テレビ電話で行われました

インタビュー「パンデミック・礼拝・平和」

東北ヘルプを設置した主催団体は「仙台キリスト教連合」です。「仙台キリスト教連合」は、毎年8月15日を覚えて「平和祈禱集会」を開催してきました。今年の8月は、感染症が懸念されますから、多くの人が集う会を開催できないと判断しました。そして、それであれば「ビデオ」を使って平和の祈禱を呼びかけてはどうかと、企画が立ち上がりました。

仙台キリスト教連合の元 世話人代表で、現在も東北ヘルプ代表を務める吉田隆牧師（日本基督教改革派甲子園教会牧師）が、「パンデミック・礼拝・平和」を主題として、お話しくださいました。東北ヘルプの事務局長が質問をして、それにお答えいただくという「対話形式」で、お話は進みました。以下はその抜粋です。

ビデオは、右のQRコードか、あるいはURLでご覧いただけます。

一緒に心を合わせて、今、平和を求めて祈ることができればと思います。

(2020年7月1日 事務局長 記)



<https://youtu.be/Rev4PhUe6EQ>

【ヘブライ人への手紙 10章 25節から】

川上：この感染症拡大の影響で、「集会をやめたりせず…」という聖書の言葉が、厳しく響いたようにも思います。このあたりから、先生のお考えをお伺いできますでしょうか。

吉田：聖書を、この機会に、改めて読んでみました。すると、聖書の中には、結構、一人で礼拝している場面がある。つまり、一人であろうと家の中にこもってしようと“礼拝”はできるんだということを示す聖書の箇所は、案外たくさんあることに気づきました。そのことを改めて知らされて励まされました。それでは、にもかかわらず、私たちが皆で集まる意義はどこにあるのかと言えば、それは（ヘブライ人への手紙にあるように）本当に私たちが「互いに励まし合い、愛し合うという」ためなのだと思うんです。ですから、逆に言うと、今回、多くの教会が礼拝を休止した理由の多くは「ご年配の方や健康に不安のある方が感染しないように」とか「ひょっとすると自分が感染させちゃうかもしれない」という、その心配が大きかったのではないのでしょうか。「自分が感染するのはいいけれど、自分が感染させたくはない」。まして教会が地域の感染源になるようなことは避けたい。このことを考えてみると、やっぱり「お互いの事を思っているから礼拝を自粛する」ということだと思うんですね。「集まる」のは“愛”のために集まるわけですから、同時にまた、「集まらない」としても“愛”のために集まらない。そのことを、今回、私たちは、どこの教会でも何となく感じていたのではないのでしょうか。ですから、バラバラになった時に「今度はどう、愛の配慮ができるだろうか」と皆さんお考えになって、インターネットを使ったり直接出向いたり、お手紙を一人一人に書いたりとか——本当に私、いろんな教会の実践例を伺うたびに「よくなさったなあ」と感心させられるんです。しかもこんなに短時間、短期間で、これだけのことをされた。諸教会が一所懸命やってらっしゃる働きは、本当にすごいことだと思ったのです。それはある意味で「2つの震災（阪

神淡路大震災と東日本大震災）」を経て「ディアコニア」ということを、どこの教会も考えるようになったということでしょう。もちろん、今回は「世間全体」に対するディアコニアということではなかったかもしれない。しかしむしろ「自分たちの教会」に関わる人々に対するディアコニアを、それぞれの教会が一所懸命されたんじゃないでしょうか。この意味で、まさに“愛”のために集まるのだから、集まらないのも“愛”のためだというのは、よくわかることでした。

川上：なるほど。そうですね。

一番痛ましいのは、どこかの教会が「礼拝ができなくなった」ことで、互いにさばいたり・刺したり、ということだけは避けたいと思っていました。今、とりあえずそういう事は起こらなかったように思うのです。お互いに気遣い合うと言うんでしょうか。痛みを分かち合うということが、できたように思うのです。たとえば、カトリック仙台教区では聖体拝領「だけ」が行われていたそうです。先日、世話人会で、参加された神父様が教えてくださいました。その時の、神父様のお話する様子が、とても、辛そうだった。この辛さをみんなで、こうして共有している限りはたぶん「礼拝は守られている」という気がしたのです。

吉田：そうですね。先ほど言いましたように「どういう環境の中でも礼拝はできるし、繋がりを作るんだなあ」ということを、特にこういう最新の技術を使って知らされたと思います。カトリックの場合には、ミサを映像でご覧いただくということに一所懸命早くから取り組まれました。プロテスタントの場合にはむしろ説教を届けるということをしました。礼拝全体が難しければ説教の部分だけでもオンラインで配信したり原稿を配ったりとか。とにかく自分たちにとって霊的な養いのために必要なことをあらゆる形でやってみる、ということに非常に力を注いだでしょう。おそらく多くの教会がそうであったと思うのですが、オンラインにすることで、当初は「これが礼拝か」ということも言われたりご苦労もあつたりしたと思

いますけれど、オンラインにすることによって、コロナのずっと前から教会に来ることができていなかった方たちが礼拝に参加できるようになって本当に嬉しいとか、一緒に教会には来ないけれどもちょっと気になっていた未信者のご家族と一緒にご覧になるとか、あるいは一般公開していた教会の場合には自分たちの教会員数をはるかにこえるアクセス数があったりとか。このように新しい発見が生まれ、いろんな可能性が同時に生まれたように思います。

川上：このあいだ、東ヘルプの中澤牧師と喜びを分かち合ったことを思い出しました。ペンテコステの前の週にアップロードされた、ある方が平日に礼拝の動画を配信していて、その中で「今、動画を見ておられる皆さん」と呼び掛けて、「今度の日曜日はペンテコステでございます。お近くの教会に行ってください」って言っていたのです。それはあるいは、信徒の皆さんには「当たり前」に思われるかもしれないけれども、牧師業界の中では「隔世の感」と言うべき事柄です。「他所の教会に行かれたら傷つく」みたいなことが普通に起こっていたし、あるいは、悲しいことですが「他所に行った人」を責めるということだって実際起こっていた・いる——それが変わったな、と思うのです。それは津波の被災地でたくさん、あったことでした。ボランティアの人たちがたくさん教会に来て「どこに行く」って言ったときに「うちにきなさい」という教会はほとんどなかったんですよ。どこでも礼拝に出て、そのことをみんなが喜んでいました。あるいはの被災者の方で「お世話になったから」って教会に行こうと思ってくださった方も同じで「自分の教団の教会は遠くにあるのだけれど、そこまで行きなさい」と言った人は、ほとんどいなかった。そういうことが今回、パッと広がったような気がして、この間、中澤先生と喜んだんですね。そんな事を思い出しました。

【古代教会と日本の教会】

次の質問に移ります。先生が最近お書きになった本（『キリスト教の“はじまり”：古代教会史入門』いのちのことば社）を拝読しました。古代教会においてパンデミックの中でも教会が奮闘したことが書かれていたことが、紹介されていました。そのことも踏まえての質問です。古代教会と日本の教会と照らし合わせる中で、今の日本の教会が学ぶべきことの多くある気がします。それはまさに先生がご自分の本の最初の方で力説なさっていることだと思うんですが、特に今回のことを受けてどんな事が言えるでしょうか。

吉田：そうですね。古代教会に限らず、世界史上何度もパンデミックは起こってきました。特に今

こうした状況の中で、教会がどのように動いてきたのかを知ることは、わたしたちにとって勉強になることだと思います。古代教会の例でよく言われるのは、古代ローマ帝国を襲いましたウィルス禍の中でも献身的にキリスト者たちが働いたということです。多くの命を救いました。また、「不思議とクリスチャンたちは感染しなかった」という話も伝わっています。とにかく、他の人たちの命のために一所懸命キリスト教は労した。そのことがやはりキリスト教に対する見方を大きく変えて行くことにもなりましたし、人々の信用を勝ち得ていった。このことはすでによく言われることですし、私もそういうふうには書いたと思います。

しかし、それは、古代という医療や福祉関係のシステムがほとんど整っていない社会の中でのことです。實際上、そのように（医療と福祉のために）動いた人間が当時は少なかった。まして自身自身の命の危険を犯して動いた者が少なかったもので、目立ったのだと思います。しかしながら今日、例えばわたしたちの状況は、古代とは違います。むしろ今回、多くの方々がきちんと認識されたように、医療関係者の方々が今なお命の危険と背中合わせに懸命に労していらっしゃる。あるいは、介護ですとか福祉関係のお仕事も、そうです。それらは結局、現場から離れるわけにいかない仕事です。「三密」を避けるわけにはいかない。そうした中で懸命に仕事をしようとしていらっしゃる。ですから（古代のように）教会がそうした仕事に直接関わるといった必要はないでしょう。むしろ、そういう方々を応援する立場に今はあるのだと思います。

ただ、それにもかかわらず、私たちが古代教会の姿から学ばなくてはいけないことはやはりあると、私自身は思っています。一つには、弱い立場にある方々や人々から顧みられない命が危険にさらされていないかということに対する眼差しというものを、わたしたちがいつでももっていないといけないということです。例えば震災のときに問題になりましたように、「障がい」を持っていらっしゃる方々へのケアや「貧困」の中にいる方々、ホームレスの方々など。そういう方々へのケアを誰が・どこが中心になって当たったのかということ、（混乱の中にある時は）行政の目の届かないことがあるわけですね。そういう方々がいないだろうかと考えていく発想というのは、やはり今日でも同じように必要なことだと思います。もう一つ、私が古代教会から非常に強く励まされるのは、彼らが持っていた信仰と言いましょか、希望ということです。キリスト者にとって「この世の命がすべてではない」ということ。それを超えたところを私たちは見ているということ。そういう価値観の中で動くということでしょうか。それを私たちは今

日も学ぶべきだと思います。最初のヘブライ書 10 章 23 節の言葉で言うと、「公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」ということです。私たちは日頃そのような希望を語っているわけですから、危険の中にある時には、いっそうそのことを強く語って行く。その信仰のあり方というものは、依然として今日も私たちにも問われているように思うのです。

川上：そうですね。もうすでに先生がお話くださったんですが、古代の教会が頑張ったということの裏側には、やっぱり犠牲もまたあったということ、その犠牲がやっぱり一つのインパクトになって、教勢が伸びていったということは事実です。それで、私たちが時々その「伸びていった」ことにあまりにも惹き込まれてしまって、いつしか、「犠牲をいとわない」ことがすなわち「いいこと」のようなことにもなって、そして世の中との軋轢を生んで、かえってやっぱり、逆効果になる。人が傷つくようなことも起こる。多分私たちはそうした間違いをしてきたのかもしれない。そういう意味でも古代のあり方って、私たちのあり方にとってやっぱりヒントが多い。そのことを先生は、この本のなかで、ずいぶん意識されたんじゃないかなと思ったのです。それはやっぱり今回のことでもそうだったですよ。

吉田：そうですね。そう思いました。おっしゃったように、その後キリスト教が広まったというのは結果であって、別に「そうなるために」したわけではない。そのところを混同してしまうと、まずいと思います。

川上：「広まった」から、キリスト教にとって酷いことになったのかもしれない...

吉田：そうそう、それもありますよね。

川上：古代のパンデミックの中で、カルタゴのキプリアヌスの殉教への情熱が思い出されてきます。要約すると、こんな感じです。

医者が患者を見捨てていくような事態になってしまった、その中で、そこに飛び込んでいく信仰者がいた。自分は死んでいってもいいという、そういう信仰のあり方がひとつの非常に強い影響力、インパクトをもたらした。その時、キプリアヌスは、「それで死んでいったとしても、喜ぶべきであって悲しむべきでない」と語った。「悲しんではだめだ」と。「死んだことを喜べ」と。

このようになってくると、なんだか、おかしいことになっているな、と思うのです。例えば、教会が地域の中で、悪い形で目立つことが起こる、その時、それで怒られたりする、そのときに、こういうあり方に影響されて「開き直る」ようなことになると、まずいことが連鎖する——ということも思っていました。そういうことを考えるときに

大事なことが、今おっしゃった中にあったかと思うんですが、どうでしょうか。

吉田：難しい問題ですね。古代教会は、一種独特な時代の空気の中で、殉教というものに対する熱心を指導者たち自身が煽ったところがありましたし、実際、彼らがそうして死んでいった時代です。“キリストに倣いて”という非常に強い霊性が働いたということは否めないことです。ですが、例えば同じパンデミックの中でも、宗教改革者のルターの場合は、少し異なります。「私たちは死をも恐れない」という信仰を強調すると同時に、「自らみすみす感染症の中に飛び込むのは無謀であって、神を試みる行為である」と言っています。そんなことをしてはいけないと。“大胆な信仰”と（具体的な）“愛の業”というのは、状況によって変わるわけです。「私たちは何をやって大丈夫なんだ」というのが我々の信仰ではないと、ルターは言うわけです。私は本当にその通りだと思います。

自分が信じている価値観に生きるということが、最終的には大切なことだと思います。けれども、“愛”というのはやはり（私たちがみな聖書から教えられていますように）内側から出てくるものであって、人に強制するものではありませんし、これが正しいという正解があるわけではない。やっぱり自分の置かれた状況や目の前にいる人たちを目にしたときに、自分が判断して、どう行動するか。そういうところで“愛”ということは問われてくる。決して一般化することができない。そんな気が致します。神さまは、私たちが「無謀」をすることを決して望まれない。それは、私たちが子どもたちに抱く思いと同じだと思うのです。「命を簡単に失っていい」などと、神様は決して思っていない。それにもかかわらず、そういう神様に愛を受けている者として、ある状況の中である現実に直面したときに「動かずにはおれない」。そういうことが、私たちの中には大切なこととしてあるのではないかな、と思うのです。

川上：なるほど。今、先生は、「愛は一般化できない」ということを語って下さいました。そのことが、非常に、核心に触れている気がしました。

「神様を・福音を信じる。神は・福音は一つだ」とか「教会を信じる。教会は一つだ」と「信じる」ことには、どうしても「一つ」になっていく傾向が伴うかもしれません。それは仕方がないことで、同時に、警戒すべきことでしょう。「信仰」には、そういう傾向がある。

他方で、「愛」には「一つになっていく傾向」は伴わないはずだ、と思ったのです。「神様は私たちを愛してくださる」と言ったとき、私たち「それぞれ」を、全然違う一人一人を、愛してくださる。

とすると、信仰が「一般化して突き進む」という傾向があり、それに警戒しなければならぬのであれば、「愛」においては一層、絶対にそんなことをしてはいけない、ということにもなるでしょう。「愛は、一般化できない」というお話を聞いて、「なるほど!」と、今、思いました。

【平和について・距離について】

川上：このビデオは、ご自宅なり教会ごとで小さく集まり、あるいは一人で「8月15日」を覚えて平和を祈る、そのために撮っております。それで、今「平和」を考えてみたいのです。

それは、今まで何ってきたお話と無縁ではないと思います。このパンデミックの事柄が、やはり戦争という事柄と繋がっていく雰囲気を作り出している。たとえば、生々しいことですが、トランプ大統領はついに、WHOからの撤退をすると、先日、短い演説をした。つまり、国連が分裂しかけている。そうした中で、今、アメリカの原子力潜水艦の動ける全艦が、中国に向かって出撃した。今回の感染症拡大で原子力空母が動けなくなり、原子力潜水艦が「どさっ」と太平洋へ出て行って、今、米国は中国に軍事的な圧力をかけています。つまり、「戦争のうわさ」は、どんどん強くなっているように思います。そういう時を過ごしながら、私たちはこの夏に「平和」を考える。——どんなことを先生は、お感じになりますでしょうか。

吉田：一気にお話が大きくなってきました。とても難しい問題だとは思いますが。ご指摘のように、ある種の危機に、私たちは直面しているのかもしれない。パンデミックですから、基本的には世界的な大流行となる。世界を巻き込んでいく。その中で国家にできる対策は、ごく限られています。つまり「距離を取る」ことしかできない。それは人間の限界を現わしているのでしょうか。先日、あるドキュメンタリー番組を見ていましたら、細菌学者の方が嘆いていました。「スペイン風邪」のパンデミックからもう100年も経ったというのに、未だに予防のためには、距離をとるということしかできない。医学がこれだけ進歩しても、それしかできないんだと。

「ソーシャル・ディスタンス」という言葉がありますね。私は、あんまり好きではないんです。本当は、「ソーシャル=Social=社会的」に距離をとってはいけないと思うからです。人間ってというのは社会的な動物ですから。ですけれども、実際には国を閉ざしたり、他国の人たちを締め出したり。結果、そういうことによって、ある種の精神性が育まれる。「自分が守られればいい」とか「自分の国だけが守られればいい」という発想に陥る。

そういう危険性が、一つにはあります。

もう一つは、しばしばどこの政府も同じだと思えますが、国民の恐怖・不安があり、それに十分応え得ない政治のあり方がある。そして、そういう時に出てくる政治の欠点・汚点というものを隠すために、「どこに責任をなすりつけるか」という方向に力が向き、「どこの国が悪い」と矛先を他に向けようとする。こんなことが絡み合っていけば、戦争ということにもなりかねないですね。

そういう中で、私たちは今年も8月という、「平和」を考える時を迎えるわけです。今日のような状況の中で「平和とは何なのか」と改めて考えます。皆がそうやって他の人と距離をとっている。自分だけ良ければいいと思っている。こういう発想では「平和」は作れないというのが、私たちの考えだと思うんですね。距離を取れば(ある意味、直接剣を交えられないわけですから)戦いは起こらないという考え方もあるでしょう。しかし、それが「平和」なのかということになりますと、私たちが考えます「平和」は、そういうものではないと思いますね。本当に私たちが「互いを大切にする」という精神のもとに、みんなが神様の恵みのもとに豊かに生きるというのが「シャローム」ということだと思うからです。

私たちは今、誰しものが陥りやすい過ちに気づくと思います。見ず知らずの他人に近づくだけで、距離を置こうとする自分がある。そんな感覚を、たった数カ月だけで醸成されてきてしまいました。衛生面では確かにそうかもしれないのですが、でも人と人との心というものが離れてはいけない。「平和」は密にならないと作り出せないものです。ですから、そういう自分中心という考えから抜け出していくことを、ある意味で私たちは意識的にしていかないと巻き込まれてしまうと思うんですね。その意味では、特にインターネットなどを通して——変な情報もいっぱい入ってきて、そうした情報に動かされた面も今回あったのではないかと思います——それをむしろ有効に使って、いろんな方たちとつながる。日本だけじゃなくて、いろんな国の友人や知人と、この状況の中でつながってゆくという、まさにそれは私たちが作り出していく「平和」の一つの形になっていくのではないのでしょうか。

川上：「ソーシャル ディスタンス (社会的距離)」という言葉、あれは、変だと思うのです。やらなきゃいけないのは「フィジカル ディスタンス (物理的距離)」の確保であるはずなんです。この言葉の発信源は WHO でしょうか。実に、不思議に思われます。なぜ「こんな言葉」が世界中で流通しているのか。

そうなってくると、もう一度、お話が戻るよう

に思われます。「集まることをやめたりしないで」というのは、響くような気がするんですね。つまり「集まるために、さあ、何か工夫しなさい」と、聖書が励ましていると思うのです。「愛の業を行うために、工夫しなさい」と。

先生がおっしゃったように「離れていれば、戦争が起こらない・問題は起こらない」という風潮は恐ろしいものです。実際には、それは本当に「逆」だからです。「離れていればいるほど、戦争になる」。このことが、特にイラク戦争あたりから、はっきりしています。恐ろしいことに今、国内でも、排外主義がどんどん起こっています。つまり、身近に朝鮮半島由来の方々がいれば起こりえないようなデマの流布等ですね。その拡散は、やっぱり、他者との「社会的距離」をとることによって起こる。そして結局、平和を脅かす。で、条件が整えば戦争にもなる、ということだと思ふのです。

だから教会は「ソーシャル・ディスタンス」に抵抗しないとイケない。そう思うのです。もちろん「感染予防」はします。が、「ソーシャルディスタンス」は拒否をします——そんなふうには、聖書に励まされて進んだらいいな、と思うのです。

吉田：そうですね。だから、こういう中で香港でもアメリカでも非常に大きなデモが起こっている。これを私は、すごく大きな一つのシンボルだと思っているのですが「ソーシャルディスタンス」なんてことを言ってもらえない。「今こそ団結しなかったら、もっと大きな悪がある」というわけです。人間を損なう大きな悪の状況に対して、私たちは抵抗しなくてはイケない。そこには非常に大きなメッセージがあるのではないかと思うのです。

【「3.11」を振り返って】

川上：それでは、最後の質問です。

「ソーシャルディスタンス」の、その正反対のことを、私たち幸いにして、一度、見たと思うんですね。つまり「3.11」の時に起こったことです。あの時は原発事故もありましたから、本当に今と似てるわけです。それこそ「ディスタンス」を取らなければいけなくなった。東日本全域に、最初は「放射性ヨウ素」が、その後も「放射性セシウム」などが、広域にまき散らされた、でも、そうした中に人々が入ってきてくれました。本当にその時、私たちは奇跡を見たわけです。

それで、質問です。

「3.11」の中で教会はともかくも結束した。垣根を乗り越えて力を合わせる事ができた。あの時、奇跡が起こったと思うのです。それは、どうして起こったのでしょうか。

あの時、私たちの教団でも、1995年以降の確執を、本当に自覚的に乗り越えようとした。本当に奇跡のようなことでした。奇跡的なことですから、「それがどうして起こったか」と質問すること自体が不合理なのですが、それでも、一応、質問させてください。つまり「神様がやったのだから」として「神様に答えをお任せしてしまう」ということも、あり得るでしょう。でも、それが起こっていった過程があり、「人の祈り」とか「決断」とか「課題意識」とかが、あったと思うんですね。そういうことを少し思い返したく思うのです。

今起こっている困難は やっぱりまだ序の口だと、尊敬するある方が言っていました。中小企業の大量倒産が起こりそうだと。それで、その方は「今できることをとにかく始めている」と言っておられました。

今起こっている困難の中に、もう一度やっぱり、あの時の奇跡が再現されるべきであるし、それを、教会に期待しなければイケないと思うのです。「私は教会を信じます」と告白する。「教会に信頼を置く」ということは、そういうことだと思ふのです。私たちは、奇跡を神様に求めることができると思うのです。そして求めることを怠ると、神様が奇跡を起こしてくださった時に、多分、私たちが、それを見逃すということにもなりかねない、と思うのです。

今ずっと「パンデミックの中での教会」にある信仰とか愛という事柄を古代から振り返っていただきました。そして、今、大きく世界が不安定になって、私たちは「ソーシャルディスタンス」ということが正当化されるような雰囲気の中にある。でも教会が、逆に垣根を越えていく。共に力を合わせる。「3.11」の時に起こったことを振り返りながら、今、祈るべき事柄は何だろうと考えた時に、先生はどんなふうにお考えになりますか？

吉田：「垣根を乗り越えて」と表現してくれました。私たちが直面した東日本大震災、それは結局、垣根を全部流していった。物理的にですが、垣根は流された。それは、同時に、象徴的な意味も持っていたと思います。被災した方々皆が、同じ境遇・同じ危機・同じ苦しみをなめた——もちろん一人ひとりの被害状況は違いますけど。そういう中で、自分が日頃から作っていた小さな垣根というのは、結局ほとんど何の意味も持たなかったと、そういうことだったように思うのです。

自分たちが直面している危機が、ある時、自分を守るために取り囲んでいる垣根よりもはるかに大きな問題であるとき、垣根なんか作っていたらダメだということになる。本当に皆で何とかしなきゃイケないと、そういう思いになれたのだと思うのです。しかも——ここが今とはちょっと違う

かもしれませんが——「自分が助かればいい」という気にはならなくて、本当に今命が損なわれようとしている人たちのために何かしなければという、ただその思いだけで、おそらく私たちは動かされたんじゃないでしょうか。

もう一つ象徴的なのは、私たちがいつも現場で祈るところから始めたということでしょう。いろんな伝統の教会の方々がおられましたけれども、一緒にお祈りをして始めた。とにかく、人間の力では及ばないことに向き合っていたわけですから、神様に頼って何とかしたいという、そういう働き方だったのではないのでしょうか。それは、ある意味で、私たち人間の根本的に重要な姿を示していたのかもしれない。

そうであれば今、子どもがこの時にしていかなくはいけないこともおそらく同じことで、さっきの「ソーシャルディスタンス」という言葉に戻ってしまいますが、やはりディスタンス（距離）を作るということをしてはいけないのではないかなと思うんです。皆で何とかしなければいけない。それを今回は「それぞれがお家にいることで、お互い助け合いましょう」という言い方がされたんですけれども、こここのところはちゃんと区別しなければいけないことだと思うんです。皆の心の距離を作ってはいけません。垣根を取り払って、皆で何とかしなくてはならない。特に、弱さの中にある、命の損なわれそうな方たちに何が出来るのかと考える。こういうあり方が、今、求められているのかなと、そう思います。

川上：今、たしかに、あの時のことを思い出さことができます。こんなに違うけれど、同じ神様に、同じ言葉遣いで祈れる、という発見が、あの時にありました。あるいは言葉遣いが違ってても、でも「主イエス・キリストの名」によって祈る。なるほど、それが今すべき事である。

「何を祈るか」というのが私の質問だったのですが、多分それは間違っていました。聖書にちゃんと書いてありましたね。よく考えてみたら、そうです、祈る言葉は、聖霊がちゃんと「とりなす」から、とにかく祈れ、ということです。今「3.11」の時のことを思うと、本当にそうだと思いますね。とにかくに祈る中で、祈りの言葉は見つかってくる。そのことを、お話を伺いながら思い出しました。

ずいぶん時間を長く使ってしまったってごめんなさい。お祈りをして頂いて、この時間を閉じたいと思います。先生、お祈りをお願いします。

吉田：では、お祈りしましょう——

「わたしたちには

神の家を支配する偉大な祭司がおられます」

(ヘブライ 10:21)

愛する父なる神様、
子なる主イエス・キリスト、
また聖霊なる御神。

私たちのためにあなたが成し遂げて下さいました
大いなる救いを、心から感謝し、み名を崇めます。

この世界は、あなたの終わりがくる時まで、
本当に、何度となく悲惨を繰り返し、
悲しみを繰り返します。

神様、今もまた、
この国のみならず、世界中の人々が呻いており、
とりわけ、病のゆえに、
その尊い命を落としております。

神様どうか私たちをあわれんでください。

そしてどうぞ、
その弱さの中にあります者、
恐怖の中にあります者、
また痛みの中にあります者たちに、
あなたのあわれみを注いでください。

速やかなる癒しと、また救いを
お与えくださいますように。

そのために懸命に関わって
労していらっしゃる方々を
神様が支えてくださって、
その業をお用いください。

願わくはこの時を

速やかに終息へと
至らしめてくださいますように、
切にお願いいたします。

ですが、一つのことが終われば、
また別なことが起こってまいります。
それが私たちのこの世界です。

ですから、どうか主よ、
私たちのためにいて下さいます
この偉大な祭司の故に、
私たちが真心から信頼をして
あなたに近づくことができますように。
信仰を励ましてください。

また、私たちが日頃公に表しています
この希望の言葉を
しっかりと保ち続けることができますように、
その希望に私たちが生きることができますように、
励ましをお与えください。

それにもかかわらず、
数々の弱さや欠けが私たちにはございます。
ですからどうか
私たちが互いに愛し合うために、
励まし合うために、集まることができますように。

さまざまな手段を用いて、
互いにつながり続けることができますように、
かえりみをお与えください。

そうして、このようにあなたに結びあわされた
私たちの教会が、
やがてこの人類全体が味わうであろう「平和」の
一つかたちであることを自覚しつつ、
どうかこの混乱に満ちた世界にあって、
「平和」を作りだしていくことができますように、
上よりの力と励ましをお与えください。

こうして、ビデオを通してではありますが、
多くの方々とつながることができましたことも、
心から感謝いたします。

あなたの御手にすべてをお委ねして
感謝をもって
主イエス・キリストのみ名によって
お祈り致します アーメン



子どもたちを「追加被ばく」から守る

2020年6月18日、仙台食品放射能計測所といわき放射能計測所をテレビ電話でつなぎ、会議をしました。今、いわき計測所は、「TEAM ママベク」のみなさまとの協働事業となっています。「TEAM ママベク」の活動を担ってくださっている皆様は、この前日、いわき市の市議会本会議場に行き、大切な一歩を進めておられました。いわき市の市議会本会議で、汚染水の陸上保管の継続を求める請願書が審議され、いわき市議会が、請願内容を正式な文書としてまとめて国に提出することと、決したのでした。その活動の最初から中心的に関わってこられたのが、「TEAM ママベク」の方々だったのです。会議が終わった後、この活動について、「TEAM ママベク」の千葉さんに、お話を伺いました。以下に、その抜粋をご紹介します。

(2020年7月2日 川上直哉 記)

川上：今回の請願 (<https://cutt.ly/Dop6o2A> に全文がございます) が市議会において全会一致で採択されましたこと、本当にすごいことだと思います。この請願への思いを教えてください。

千葉：国が汚染水を海洋放出しようとしている。強行しようとしている。それを抑止するためには、原発被災地となった各自治体の中から意見が出なければならないと思いました。そのためには、私たちのいわき市も、と考えました。

川上：この運動は、いくつもの地方自治体の連帯によって展開しているのですね。

千葉：はい。私たちのいわき市では「いわきの海と風の会」が主体となって進めています。この運動は、汚染水の問題が話題になってすぐに始まりました。各地で意識をもってくださった方々が緩やかに繋がっていきました。そして、2020年5月、請願書を作るために「いわきの海と風の会」が立ち上がったものです。福島県内では、今、同様の運動が12ほどの市町村で進んでいます。この10年の間に、こうしたネットワークが、原子力災害の被災地で醸成されてきました。たとえば、「モニタリングポストを撤去する」という行政の動きに反対した時も、このネットワークが連携をとったのでした。

川上：議会で「全会一致」としたことに、大きな意味があると思います。そしてそのためには、たくさんの方々の努力があったことを思います。

千葉：はい。例えば、福島県漁協の会長さんは、海洋放出に賛成していません。でも、「汚染水の海洋放出に反対すること」には反対する、という人も、たくさんいます。それで、例えば今回の請願書には「反対」という言葉を入れませんでした。そうした「文言調整」は、何回もあったのです。

川上：“「反対」に反対”という立場の方々は、どうして、そうおっしゃるのでしょうか。

千葉：陸上保管が不可能と思っているのかもしれませんが。海洋放出への健康被害もない、と思っている人もいます。

川上：実際、汚染水の「陸上保管」は、無理なのでしょうか。

千葉：無理かどうか、きちんと議論もしていない、ということが問題だと思います。2018年8月、富岡町・郡山市そして東京都で公聴会が開かれましたが、その時に、「陸上保管」の検討を求めた人が多くいました。しかし、この2月に、「多核種除去設備等取扱いに関する小委員会」というところで、「陸上保管」は選択肢から外されました。「やりたくない」という国の姿勢がはっきり見えてくると思います。あるいは「経費（お金）の問題」なのかもしれません。ともかく、私たちの知る範囲では、まだ「議論もしていない」と言うのが、「陸上保管」だと思います。

川上：確かに、陸上保管が「すぐ」できなくなるというのは「フェイクニュース」の類だと思います。

千葉：私たちがわからないのは「半減期を待つ、ということが出来ないのか？」ということです。ぎりぎりまで、置いておくべきだと思います。その間に、処理技術も進むはずですよ。そうしたことを話し合っ、結局、「今は」流さない、ということが、今回の請願の落としどころになりました。

川上：ただ「反対」するのではなく、粘り強く、違う意見の方とも話し合いを続ける。そのことの困難を引き受けておられる姿に、深い敬意を覚えます。

千葉：汚染水については、今の技術においては「どうやっても除去できない」核種がたくさんある、ということも分かっています。「被ばく」をした私たちとしては、これ以上の「追加被ばく」を、絶対、子どもたちに、させるわけにはいかないと、一人の親として、思うのです。未来に向けて、そう思うのです。これから、この活動を全国に拡大していきたいと思っています。議会は、多数決がルールとなっています。だから、考え方が違う議員さんたちと、どうやって、連携するか。その課題と向き合っ、なんとか、突破していきたいと願っています。

(了)

気仙沼「障がい児」支援の展開

東北ヘルプ理事 秋山善久
(日本同盟基督教団仙台のぞみ教会 牧師)

震災直後、気仙沼市内に住む母親たちの中に、「障がいと共に生きる子どもたち」を支援する仕組みが足りないことを痛感して、途方に暮れていた人たちがいました。それを見て「これではいけない」と立ち上がった、地域の世話役の方がいました。そして、それを応援した全国のキリスト者と他の宗教者がいました。東北ヘルプも、その動きに参加しました。そして、気仙沼を故郷とする私が、今に至るまで、つながり続け、支援を続ける担当者となりました。

支援の動きは実りました。2013年12月に法人 NPO 法人「セミナーレ」設立、2014年2月から、放課後等デイサービス事業所「ほっぷ」開設と進みました。気仙沼南部の本吉という場所で、最初は理事長自宅の敷地に建てたプレハブ小屋で活動を開始しました。次第に全国の募金が集まり、そして地元の篤志家の献金があって、1,600坪の土地が確保されて施設の整備が進みました。今、ショートステイなど、5つの事業が展開しています。

昨年「生活支援」の事業のために「最初のプレハブ小屋」を再整備して移築し、施設の増築を終えました。増築した部分で行います「生活支援」というのは、養護学校などを卒業した後の「居場所」を作る事業です。

こうした働きは、今、軌道に乗り、市の信頼も得始めました。「経常収支前年度比18.6%増、経常経費前年度比29.8%」と、苦しいながらも堅調な事業の拡充が、5月18日の総会で報告されました。

おとし暮れ、本吉の事業と同じことを気仙沼市北部の水梨という場所で「やってみよう」という人が現れ、「セミナーレ」との連携の中で、新たに NPO 法人「水梨かふえ」が始まりました。そのスタッフに看護師が4人ほどおり、重度の障がい（酸素マスクを着けている、等）と共に生きる子どもたちもケアできる事業が開始されました。この5月、一年目の活動が終わり、総会が開催され「夏には毎月300人を超える利用者があった」等の報告がなされました。

私は、両方の NPO 法人で役員をしています。二つの総会の資料を精査して、気が付きました。二つの法人合わせて、1億円を超す予算となっていました。「障がいがあるけれど、施設にも行けない、自宅に閉じこもっている」という子どもたちがいる、ということで、その子どもたちへのケアを行う事業の認可を得て、今年度から新しい事業を展開することになりました。また、水梨の施設は手狭になってきましたから、廃校になった小学校を利用して、活動が展開するに至っていました。

全国・全世界のキリスト者のネットワークがつながり、そして、地元の思いが必要につながって、働きが確かに展開しています。今、その一步一步を見て、神様の恵みを感謝しています。(丁)



増築した「生活支援」事業の施設

卷末言

2020年度の総会報告をお伝えするニュースレターをお送りします。私たちの働きは、神様の導きを求めて続けられてきたものでした。その未来を模索する議論は、祈りそのものとなっています。この議論に皆様のお祈りを合わせて頂ければと願います。

事務局長も寄稿して、一冊の本が上梓されました。チラシを同封いたします。最後から2本目の論文が、食品放射能計測所の働きのまとめとなっています。「風化」を防ぐための一歩です。お覚え頂ければ幸いです。

(2020年7月5日 事務局長 記)

大災害から九年後の「いま」を刻み、記憶の彼方に埋もれさせないために！

東日本大震災から九年……

この間の国や県、当該自治体が考える復興と、

被災者・避難者の考える復興とのあいだには大きな「落差」がある。

本書は、被災者にたいする支援と自立のありようをトータルに捉え、

「人間の復興」という願いを込めて、その状況を明らかにするモノグラフ

《生活記録》第3弾！

全3部の構成による本書は、第1部では復興の現状を、第2部では《自立・支援》活動の実相を、第3部では復興の記録の方法とレガシーの中身の検討を中心に、《自立・支援の「いま」と「これから」》を問い質す論考「八本を収録！

東日本大震災と 《自立・支援》の 生活記録

●編著 吉原直樹・山川充夫

清水 亮・松本行真

●推薦 室崎益輝

く評価したい。総合性ということでは、異なる分野や多方面の領域が一つの素晴らしい織物を編むように融合している。親近性という点では、被災者と被災地に対する温かい思いが太い糸のようにつらぬかれている。福島への熱い思いもひしひしと伝わってくる。東日本大震災の総括的記録として、常に手元に置いておきたい良書である。



シリーズ
完結！

六花出版

一人ひとり 寄り添い 多様性を紡ぐボランティア

●第3部 復興記録の継承と検証

原子力災害被災地における災害アーカイブ構築のための資料収集とその目的
東日本大震災の記録を残す活動と震災遺物保存の意味——福島県を事例として
福島県いわき市の住民819人を対象とした防災意識調査
他人事から自分事へ
——福島第一原発事故の被災者取材を通じて、大学生はどう変わったのか

中村洋介・島上直哉
高橋弘司
室崎益輝

川上直哉

食品放射能計測所「いのり」による支援活動——東北・ルプの原子力被災地支援
福島県復興記念公園のコンセプト形成——福島県からの視覚を中心に

山川充夫



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

小河義伸（日本バプテスト仙台基督教会牧師）

※肩書等は、すべて2020年6月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com